

歴史の中の女たち <第 26 回>

## エレナ・アリスメンディー もう一つのメキシコ革命

伊藤 滋子



<http://www.eluniversal.com.mx/sociedad/6693.html>

「アドリアナの唇は薄くて小さく、白い歯はきれいな微笑をさらに輝かせる。小さい鼻はピンと高く、両頬のえくぼが愛きょうを添え、深い影を帯びた黒い瞳は豊かな黒髪の下にある白い額と対照的である。身体のどこをさがしても欠点が見つからないとの評判だ。長い脚に腰幅が広く細いウエスト、狭い肩幅・・・サロメのような美しさで彼女が歩くと道行く人々は振りかえる。まさに弾力性のあるビーナス・・・」ホセ・バスコンセロスが1935年から39年にかけて発表した自伝小説『追憶の記』には各所にこのような文章がちりばめられ、そのアドリアナ像は20世紀メキシコの軟文学の黄金塔と言われている。そしてアドリアナは作家の愛人だったエレナ・アリスメンディーだということは誰もが知っていた。作品はこの愛人に去られたあと、失恋による苦痛と心の疼きに耐えながら書かれたため、彼女のことを「男を

誘惑して身動きできなくしたうえ、毒を盛る悪女」「ファム・ファタール＝男を破滅させる運命の女」「蛇のような女」として描き、それはステレオタイプの愛人像として、ラテンアメリカ近代文学のひとつの潮流となったほどだ。しかし実際のエレナ・アリスメンディーは単にバスコンセロスの愛人、魅惑的な女性というだけにとどまらない、自らの意志に基づいて行動するフェミニズム運動の推進者だったことが最近明らかとなり、従来伝えられてきたエレナ像は大きく変わった。

エレナ・アリスメンディー(1884－1949)はポルフィリオ・ディアスが政権の座についた年に生まれた。ディアスはメキシコ革命が始まる1910年までの26年間、6期も再選を繰り返して大統領の座にあった。アリスメンディー家はポルフィリオ政権のもとで権勢を誇った裕福なファミリーで、母方の祖父は自由主義者フアレス側近の将軍であった。エレナは14才のときに母を亡くし、母代りとなって6人の弟妹の面倒をみて、使用人を指図して家の切り盛りをしたが、間もなく父は彼女とあまり年の違わない若い女性と再婚した。エレナは主婦の役目から解放されたものの、のちに次々に11人もの子供を生むことになる義母とはうまくいかず、早く家を出るために若くして結婚する。しかし死産や夫の暴力に苦しみ、間もなく夫と別れて、テキサスのサン・アントニオに行き、看護婦養成学校に入る。まだ17才で、彼女の青春はようやくこの時始まったと言ってよい。

そのころメキシコ国内ではフランシスコ・マデロがディアスの大統領再選を阻止する運動を起こ

し、国内のさまざまな不満分子を集約する形で勢力を集め、メキシコ革命に至る土壌が醸成されつつあった。大統領選に立候補したマデロは選挙の直前にサン・ルイス・ポトシで投獄されたが、脱獄に成功し、テキサスのサン・アントニオに逃亡し、そこからメキシコ国民にディアスに対する武力反乱を訴える『サン・ルイス計画』を発表した。これに呼応して 1910 年 11 月 20 日、チワワ州ではパンチョ・ビリャとオロスコ、コアウィラ州ではカランサ、南部のモレロス州ではサパタが蜂起し、革命の火ぶたが切って落とされた。間もなく革命軍はディアスを追放し、翌年 6 月、マデロはメキシコ市に入り、11 月大統領に就任した。

一方、自由主義者を祖父に持つエレナはサン・アントニオで、亡命してきたマデロ夫妻と親交を結ぶが、このときすでにアメリカで 8 年を過ごした彼女は夫の暴力から逃げるかわい少女ではなく、自分の職業に誇りを持ち、自らマデロが率いる民主運動に賛同するという政治的判断を下せる女性となっていた。彼女はマデロが主導する再選反対クラブに入り、他の中流階級出身の女性とともに、マデロを支持する『ホセファ・オルティス・ドミンゲス反再選連盟』を結成した。それは百年前の独立に貢献した女性の名である。

1911 年 4 月、マデロがメキシコ市に入る 2 カ月前のこと、エレナは他の女性にも呼びかけて、アメリカとの国境に近い町シウダー・フアレスに赴き、戦闘や疫病に倒れた傷病人の看護にあたった。そこでは政府軍と、これを攻略しようとするパンチョ・ビリャやオロスコが率いる革命軍の間に激しい攻防戦が繰り広げられ、多くの死傷者が出ていた。戦闘は革命軍の勝利に終わり、マデロにとっては目覚ましい前進となったのだが、エレナはここで理不尽な光景に直面した。『赤十字社』は軍事海軍省に所属する政府の機関であるために、その本来の目的を忘れ、政府軍の傷病人しか治療せず、革命軍の兵士たちは何の手当ても受けないまま放置されていたのだ。エレナは文書や新聞イ

ンタビューなどでそれに抗議し、『赤十字社』に対抗して、党派、宗教、国籍を問わず人道的な支援を行う『中立白十字社』を立ち上げる運動を起こした。多くの若い医者や医学生たちがその呼びかけに応え、エレナたちは彼らとともにあらゆる障害を乗り越えてそれを実現する。それは女性たちが初めて社会的な活動に取り組んだという意味において画期的なことであった。マデロが大統領になると、『中立白十字社』は公的な機関『メキシコ白十字社』に昇格し、活動の場はシウダー・フアレスで終わることなく、首都にも広がっていった。

おおアリスメンディ、こころやさしきひとよ  
だれをも分け隔てなく、心から手当てし

自由を愛するがゆえに苦しむ者たちのため  
博愛の戦いに挑む女性たちに栄光あれ

『高貴なる白十字の代表者』と名付けられたこのコリード(歌謡曲)はエレナに捧げられたものだ。メキシコ革命の頃、さまざまなエピソードを物語ふうにするコリードが盛んに作られ、これもそのひとつであった。

「彼女は私の弁護士事務所にマデロ大統領その人の名刺をもって現れた。裁判の弁護ではなく、助言を求めるためだった。当時彼女は果敢にも中立の看護団を設立したためにさまざまないやがらせを受け、それに対処する必要に迫られていた」とバスコンセロス(アリアナ・すなわちエレナ)との出会いを描いている。彼はコアウィラでマデロの選挙キャンペーンに加わって以来の有力なプレーンであった。間もなく恋に落ちた二人は人目も気にせず、腕を組んで街を歩き、彼は堂々とエレナを擁護する記事を新聞に発表した。彼らは趣味、好きなもの、好きな文学が似通っていて、ただ一緒に居てすべてを共にすることが楽しかった。結婚して普通の家庭を築くつもりはまったくなかったが、彼には妻がいて、幼い二人の子供を非常に可愛がっていたので、家庭を捨てることができず、複数の妻を持てる回教徒だったなら良かったのに、などと言いつつ悩む。

白十字社の旗を掲げる女性たち



<http://www.inehrm.gob.mx/Portal/PtMain.php?pagina=exp-mujeres-revolucion-galeria>

この間も世の中はめまぐるしく動いていた。政権についたマデロはさまざまな勢力をまとめることができず、国内は混乱し、2年後には殺されてしまう。そして軍人のウエルタが大統領となると、すぐさまコアウィラ州知事のカルンサが反乱を起こした。マデロの支持者であったバスコンセロスはアメリカに亡命し、エレナも彼に従った。彼が公の場にある著名人であるうえに、二人は半ば公然と不倫関係を続けていたため、スキャンダルとなり、非難がましい世間の目から逃れるには良いチャンスであった。その後バスコンセロスはカルンサの命を受けて、英、仏などの主要国や南米諸国がウエルタ政権を承認しないように働きかけるための密使となった。エレナもヨーロッパや南米諸国の訪問に同行するが最後に滞在したリマで彼を置いて一人で先にニューヨークへ帰ってしまう。

バスコンセロスは妻と離婚したにも拘わらず、去って行ったエレナのことが理解できずに苦しみ、彼女を恨んだ。一方エレナの方は、いつまでも家族のことであれこれ悩み、しかも嫉妬深いバスコンセロスに絶望してしまった。5年間続いたこの関係の中で彼女自身が知性を身につけ、変わりはじめたことも見逃せない。何といてもバスコンセロスは20世紀メキシコの有数の文学者、思想家、教育者である。彼と生活をともにすることでエレナが大きな影響を受けたことは当然である。

エレナは当時の女性として、初等教育を受けていたが、文学、哲学、美学といった学問を学ぶ機会には閉ざされていた。バスコンセロスは外国に居る間も、時間があると図書館で本を読んで過ごしたが、エレナもそれについて行き、彼から勧められるまま、多くの本を読み、彼とその本について話し合った。それが彼女の成長をうながさないはずはない。バスコンセロスも「アドリアナはすぐに飽きるタイプの女性ではない」と言っているが、彼女は美しいばかりでなく、知的にも彼に応ええられるだけの素地を備えた女性であった。

間もなくカルンサがウエルタを倒し大統領となると、バスコンセロスは高等教育長に任命されるが、そのうち意見が対立すると、彼はまた亡命の旅に出る。そしてカルンサが倒されると、メキシコに戻り、1921年から24年までの間、オブregon大統領のもとで初代文部大臣として、農村部での教育、芸術、職業教育を推進、メキシコ自治大学の前身となる高等教育の学校を創設し、メキシコにおける無償教育の基礎を築いた。独立と革命の歴史を文字の読めない一般大衆に語り継ぐために、ディエゴ・リベラ、オロスコ、シケイロスらに壁画を制作する場を与えたのも彼だった。

一方、バスコンセロスと別れてひとりでニューヨークに戻ったエレナは、それからしばらくして再婚するが、すぐに離婚している。生涯子供は持たなかった。34才になっていた彼女はその大都会で部屋を借りて、完全に自立した女性としての人生を築き始めた。そして、メキシコにいたのではとうていできなかったであろう、政治、社会、文化、社会福祉などの多岐にわたる分野で、全く自由に活動するという豊饒な時間が始まる。新聞記者となったエレナは、1922年、バルチモアで開かれた最初のインターナショナル・フェミニスト会議に参加した。この大会には南北アメリカ大陸諸国のフェミニズム運動の指導者が集まり、それぞれの国で女性が置かれている現状やこれからの目標について情報を交換するという画期的な大会で



あった。その翌年にはイベロアメリカ女性連盟の設立に加わり、作家や職業女性、新聞記者の連帯を深め、自らもこの組織を通じて宗教的、政治的問題に関する意見を発信していく。彼女たちの運動はアングロサクソンのフェミニズム運動とは一線を画して、イベロアメリカの文化と精神的特性に根差した女性運動をめざすものであった。この組織は別名 *Liga de Mujeres de Raza* と呼ばれる。中南米の諸国は、コロンブスの新大陸発見の日を *Dia de la Raza*、すなわち新しい民族誕生の記念日として自らの誇りを高揚しようとした。民族はすなわち文化でもある。この辺りには *Raza Cosmica* を著したバスコンセロスの思想の影響が感じられる。エレナはまた、女性の道徳、文化、経済力の向上をテーマにした月刊誌『国際フェミニズム』を発刊し、イスパノアメリカ女性の地位向上に関する情報の普及を図った。

彼女はまた、1927年に短編小説風の自伝を発表している。自分の半生を描きつつ、自分を含めて内縁関係で世間から非難される多くの女性の立場を擁護し、自分がこれまでいかに変革を遂げ、時代に先んじるようになっていったかを表す小説であった。小説は家族や友人に自分の真の姿を伝え、自らの経験を他の女性と分かち合うことを目的として書かれたもので、発行部数も少なく、ほとんど世に知られないまま忘れ去られてしまっていた。ところが、メキシコ人女性のカノ博士がたまたまエレナの妹に贈られて保存されていた一冊を発見し、解説を加えて2010年のメキシコ革命100周年記念に合わせて発表して、初めてエレナ・アリスメンディの実像が世に紹介されたのだった。

それまでメキシコ革命で活躍した女性といえば、ソルダデラとかアデリータと呼ばれる、軍について歩き、兵士たちの面倒をみたり、武器をとって戦ったりした女性たちであった。フィクションによってロマンチックに、あるいは勇ましく脚色されているが、実際は痛ましい彼女たちの姿が個人として紹介されたり、伝記が書かれたりするこ

とはまずなかったから、カノは革命の歴史に新しい一ページを加えたと言える。伝統的な女性の生き方からはほど遠いエレナは同世代のフリーダ・カロなどと同様、男性によって作りだされた革命のヒロインたちよりも、女性の意識の深層に変革をもたらしたにちがいない。また、彼女の小説は稚拙で文学的価値は低いとされるが、エレナはその後出現する女流作家たちの先駆者でもあった。

エレナは55才でメキシコに帰国した。彼女はニューヨークで活躍していた間も常にメキシコの情勢を注意深く見守り、ラサロ・カルデナス大統領の統治下でメキシコの政情が落ち着きを取り戻し、民主政治が始まったのを見届けたうえで帰国を決意した。カルデナスが憲法を改正し、女性に投票権を与えようとしたことにも好感を持った。

だが、帰国した彼女を待ち受けていたのは、冒頭のバスコンセロスの自伝小説であった。その中に自分がアドリアナという名で登場し、ひどい扱いを受けていることに驚愕した彼女は出版社に抗議の手紙を送ったが、返事はもらえなかった。バスコンセロスはエレナのことをことさら侮辱的に扱っているが、彼女ばかりでなく、昔の友人だった人々や革命の英雄たちまでも痛烈に批判し、著作で復讐を果たしているようにさえ見える。

バスコンセロスは1929年に大統領選に出馬したものの、7%の票しか取れず大敗を喫し、1940年に帰国するまでの10年間、また亡命生活を送ることを余儀なくされた。この間にパリのノートルダム寺院の中で、彼が護身用に携帯していたピストルで新しい伴侶に自殺されるという事件があったほか、さまざまな辛酸を舐めており、自伝小説『追憶の記』はそのような失意の中で書かれたものであったことは考慮されなければならない。彼の作品、哲学的立場、政治的な仕事は批判されることが多いが、自分を偽ることのできない人であったようだ。

エレナは1949年、65才でコヨアカンにある弟の家で亡くなるまで、時折マデロの未亡人を訪問

したりして、静かな晩年を送った。自伝小説のなかで、「私は幸運に恵まれた。もう男も女もない。性の垣根はなく、私たちは皆平等である。だから

嫉妬や憎悪などの悪い感情もすべて消え去り、もう存在しない」と述べているが、その頃にはもう、その様な境地に達していたことであろう。

(いとう しげこ)

~~~~~ [ラテンアメリカ図書案内] ~~~~~

### 『壊国の契約 — NAFTA 下メキシコの苦悩と抵抗』

エリザベス・フィッティング 里見 実訳 農山漁村文化協会（農文協）

2012 年 8 月 282 頁 2,600 円＋税

メキシコは米国、カナダと NAFTA を構成することを決断し、北米経済圏の一員として生きることを選択したが、その代償として日本でいえば米（コメ）にあたるメキシコの基本食糧であるトウモロコシ農業を新自由主義経済の国際競争に晒すことになり、米国からどっと大規模栽培による安価なトウモロコシが流入し、小規模栽培の国産品を圧倒、あまつさえ GM（遺伝子組み換え）品種が入って来るようになった。

本書はメキシコが発祥の地であり、単に主食であるという以上に文化とまでいえるトウモロコシ農業の実情と地方農村の小農に降りかかってきた危機を序論「国産トウモロコシのためのたたかい」で述べた後、第1部「論争—NAFTA 締結後のトウモロコシの大量輸入と GM 論争」では、GM コーンについての専門家の議論だけでなく全国で広がった抵抗を、その背景であるメキシコの歴史と文化に深く根ざしたトウモロコシ農業の推移とともに紹介している。第2部「暮らしの立て方—NAFTA がもたらした農業の危機と生活の激変」では、トウモロコシ発祥の地であるメキシコ市からほど近いプエブラ州テワカン地峡の一農村に密着してのフィールド調査から、地域社会とその内部対立を水利をめぐる組合と国家の抗争史、トウモロコシ農業環境の激変の姿と農民的対応としての出稼ぎ・移住に至る生存戦略を詳しく紹介することによって、農民の農業と土地への関心の変化というアイデンティティの問題と、いまや農民が移民労働者かマキエラの労働者になっていくのでは？との問題提起を行っている。

新自由主義経済政策の下、グローバル化の渦のなかに、伝統農業が投げ込まれたメキシコの事例を詳述しているが、この主食食糧の大量輸入化と GM の流入の問題から、日本の TPP 参加表明に対する反証としたいとの問題意識で同社から出版されているシリーズの一冊。

[桜井 敏浩]